

## 【国語】

### 辞書案内

国語辞書を推薦する、というのがこの一文の目的だそうです。数ある国語辞書を比較して、どれがどのように使いやすいのか、という説明を簡単にすることが求められているようです。また読む方もそれを期待しているかもしれません。

しかし、ひとによって辞書を引く目的は異なるわけですから、試行錯誤をしながら使いやすいものを選んでいくしかない、というのが私の結論です。簡単ですね。また専門辞書についても、とりあえず図書館の辞書コーナーの背表紙を眺めてみてください、としか言いようがありません。世の中にはいろいろな専門辞書があるものだ、と思うことでしょう。そういうものは必要になったときに手に取ればよいわけです。おしまい。

「え？」と思うでしょう。そう、大学教員というのは不親切なのです（私だけかもしれませんが）。これだけで終わってもよいのですが、さすがにそれではあまりにも愛想がないので、以下、近代辞書について少し述べてみたいと思います。

そもそも、ひとはなぜ辞書を引くのでしょうか。

ことばの「正しい意味・用法」を求めて、というのがおそらく正解でしょう。少なくとも高校までの勉強では、この答えを疑う必要はなかったはずですが、ただ、せっかく大学に入ったのですから、もう少しちがった見方をしてみてもよいかもしれません。当然と思われることを疑ってみるのが大学での勉強の第一歩ですから。

辞書の近代史を調べてみると、大槻文彦著『言海』（1889年刊行開始）が、近代的辞書のはじまりとされています。独立した文明国家にはそれにふさわしい国語辞典がなければならぬという信念のもと、大槻はさまざまな苦労を経ながら完成させます。そして増補改訂版というべき『大言海』に至ります。『言海』はいままでいう文庫本サイズでの普及版も刊行されていますが、これはちくま学芸文庫で復刻され、簡単に手に取ることができるようになっています（2004年、武藤康史解説）。あとがきに相当する「言海跋」を読んでもと編纂の苦労などがわかって面白いかもしれません。いまでは普通ですが、配列を五十音順にし（これには福沢諭吉が落胆したという話が伝わっています）、品詞を示したり、「語法指南」という文法の解説部分を付したりしています。語釈も、英語辞書からの翻訳があったりします（早川勇『辞書編纂のダイナミズム——ジョンソン、ウェブスターと日本』辞游社、2001年を参照）。『言海』刊行時には政財界、文化人を集めた記念パーティーが大々的に開催されました。帝国議会や帝国憲法が整備され、国民国家日本が形成されつつあるときの興奮に、この『言海』が飲みこまれていたといえるかもしれません。とはいうものの、辞書編纂が国家事業として実施されたわけではないのが、中途半端なところ。当初はその予定でしたが、諸事情があつて大槻がひとりこつこつと完成させたところ、壮挙として祝ってもらった、というわけです。この「感動物語」は高田宏『言葉の海へ』（新潮

社、1978年、ほか)で詳しく描かれています。この時点では辞書には、「正しさ」というよりも、権威を背景とした正統性があるという点が強調されているように思われます。いってみれば、これが国家の言語、国民の言語である「国語」なのだ、という語彙目録を示すことが求められていたときに、その役割を果たそうとしたのが『言海』だったともいえるでしょう。またこれは大槻文彦の趣味かもしれませんが、『言海』は語源について筆を費やしています。語源説の当否はともかく、その単語の歴史を描こうとしていることが、特徴的です。いまここで話されていることばの来歴を知ること。小さなようですが、「ことばの正しさ」を保証するうえで、案外重要なことになっていきます。

なお、『言海』以降、『大日本国語辞典』(松井簡治編、富山房、1915年刊行開始)や、『日本国語大辞典』(小学館、1972年刊行開始、第二版2000年刊行開始)という最大規模の大型辞書の編纂までを含めた歴史を追ったものとして、倉島長正『「国語」と「国語辞典」の時代 上下』(小学館、1997年)があります。

ともあれ、上のようなご大層な議論がなされていた反面、文明国標準としての辞書が作成されても、国民みながその辞書を手元において、年がら年中引いているわけではありません。そもそも、辞典のことを「字引」ともいまでもいうように、ある単語をどういう漢字で書くのかを知るといふ需要が連続と続いていました。それは『節用集』という形で長く利用されてきたのですが、いまもし何かを書こうとしたとき(打つのではなく)、ある単語の漢字が思い出せなかったら、どうしますか?携帯電話(いまは、スマホですね)を取り出しませんか?

一方では文明国家の象徴としての辞書が編纂されるものの、実際にその辞書が頻繁に引かれるものではなく、節用集的なものとの乖離が(いまでも)存在しているのです。なおちなみに、朝鮮を1910年に併合しますが、その直後から朝鮮語辞典の編纂が総督府により計画され実行されました。このことは、きちんとした辞書をもつことが文明の証であることを再確認すると同時に、総督府がそれを代理執行したことは、文明の体現者が誰であるかを示すためでもありました。

さて、こうした近代的な辞書の理念と実際の使用者の需要とのあいだにある乖離を埋めていくために、文明としての辞書というとらえ方ではなく、文化としての辞書というとらえ方が発生してきました。簡単にいえば、一家に一冊辞書が備え付けられていること、でもあります。文化の香り、でしょうか。『言海』刊行後からは、それをまねた中型の辞書が各種編纂されていきます。1955年に岩波書店が『広辞苑』を発売して大ヒットになりますが、そこに至るにはいくつもの系統がありました(広辞苑編纂に関しては、編者とされた新村出の子息で編集作業にあたった新村猛の『「広辞苑」物語——辞典の権威の背景』芸術生活社、1970年があります)。しかし、この『広辞苑』編纂が、新村父子の一大プロジェクトなのだ、という感動巨編に編集しなおされることもありました。NHKプロジェクトX制作班編『プロジェクトX 挑戦者たち 10』(日本放送出版協会、2002年)で読んでみてください。辞書編纂は、『言葉の海へ』もそうですが、感動的な物語になりやすいものでも

あるようです。なかなか報われない苦勞、というところにひとは涙を流すのでしょう。最近では、三浦しをん『舟を編む』（光文社、2011年）という小説が本屋大賞を受賞するなどして話題を集めました。ここでいう「舟」とは「ことばの海＝『言海』」にこぎ出ていくものという含みがあるのでしょうか。恋愛小説でもあって、その分読みやすいですが、辞書編纂の「感動物語」に安易にのっかっている感は否めません。これは松田龍平、宮崎あおい主演で同題で映画にもなりました（松竹、2013年）。観た人も多いのではないのでしょうか。

ともあれ、『言海』以降、より低価格で部数の多い辞書が編纂されるようになっていきます。これはより実用的な辞書を求めたという点では節用集的世界との融合ではありますが、辞書というものは国民文化の金字塔である、という表象が存在した点で、近代的だともいえます。こうしたなかで、卓上辞書としてかなり売れたものに、三省堂の『小辞林』を改訂した『明解国語辞典』（1943年）があります。売れた理由は、もとの『小辞林』ではいわゆる歴史的仮名遣いによる配列だったのを、表音表記による配列に直したこと（つまり、たとえば「描画（描畫）」を引こうと思ったら、「びょうが」ではなく「べうぐわ」を探さねばならなかったのを直した——ただし、この辞書の見出しは、より表音的なので「びょおが」ですが）、語釈を文語文ではなく口語文に直したこと、によるとされています。また、アクセントが示されているのも、新しいことでした。この辞書は言語学者の金田一京助が編纂したことになっていますが、完全な名義貸しで、実際の作業は若かった見坊豪紀（けんぼう・ひでとし）がおこなっています（1997年に武藤康史の解説を付して三省堂が復刻版を出しています）。『広辞苑』の編者は新村出となっていますが、これが名目的なものに過ぎなかったことは、つとに指摘されているところです。辞書も売り物ですから、有名な学者先生の名前が必要ということなのでしょう。こうした、文明国標準としての辞書から、さまざまな形態の辞書が派生していくなかで、辞書には「正しいことば」が記載され、辞書に記載されていることがそのことばの「正しさ」を示すことなのだ、といった意識が定着していくこととなります。辞書に記載されていないことばは、「正しい日本語」ではないのだ、ということです。

もう少しいえば、岩波書店は『広辞苑』を「日本語の規範」だと自認しているようですし、版が新しくなるたびに、どんなことばが記載されたということが新聞を賑わせたりするのも、このあらわれでしょう。しかしながら、ある一握りの編者、出版社が「ことばの正しさ」を決めてしまうことができるのでしょうか。ことばとはわたしたちが日常生活のなかで使っているものです。そこで使用してきたことばのあるものが「正しくない」とされ、積み重ねてきた語感や語義が「まちがっている」とされるのは、あまり気分がよいものではありません（辞書の存在をおとしめるつもりはありません）。これと関連して一言。「国語辞典ではわからない起源と変遷！」という帯文が付されて書店に並べられたのは、『性的なことば』（井上章一・斎藤光・澁谷知美・三橋順子編、講談社現代新書、2010年）という「辞書」です。国語辞書には「正しいことば」が載っているという「常識」を逆手に取った宣伝文句だと思います。若いみなさんにお薦めしてよいのか、若干のためらいも

ありますが、これと、『性の用語集』（井上章一&関西性欲研究会、講談社現代新書、2004年）も、時間があったら読んでみてください。研究にタブーなどないのです（そう願いたいものですが）。

このような作り手と使い手との間にある乖離、についてですが、辞書を実用品として考え、語釈の内容や記載されている語彙の範囲や引きやすさなどを比べてみたものが、『暮らしの手帖』1971年2月号の特集「国語の辞書をテストする」でした。いってみれば消費者（使用者）による商品テストなのですが、そこでとりあげられた辞書のテスト結果は散々なものでした。乖離があるから当然のことかもしれません。どんなに大層なご託を並べても、使い物にならなければ意味がないではないか、ということです。こうした視点は大切ですが、それを意識した編纂が、この後なされたかという、残念ながらそうではありません。ユーザーフレンドリーな辞書というものは、形容矛盾なのかもしれません。だからせめて、自分で使ってみて目的に応じた使いやすいものを選ぶしかないのです。ちなみに、北原保雄監修『みんなで国語辞典！ これも、日本語』（大修館書店、2006年）は、普通の辞書には記載されていないけれど、自分たちはよく使っているという、いわゆる若者ことばや新語を、語釈も含めて投稿という形で集めて編纂したものです。ことばの使い手が参加して作る辞書、という点では、新機軸ではありますが、さりげなく「国語辞典としての規範を示すものではありません」と表示されているところに、「乖離」の側面を見ることができます。

さて、話を戻して、先の卓上版の『明解国語辞典』から、『新明解国語辞典』、『三省堂国語辞典』が分岐して編纂されていきます（詳しくは、柴田武監修・武藤康史編『明解物語』三省堂、2001年）。この『新明解国語辞典』は、山田忠雄が編集主幹として編纂をはじめると、その語釈が独特なものだ（ときには毒舌を吐いているようにも読める）、ということで注目されるようになります。それを指摘した著書のタイトルが、『辞書がこんなに面白くていいかしら』（西山里見とQQQの会編述、JICC出版局、1992年）であることが示すように、辞書は面白くないもの、というのが一般的な見方であるわけです。この『新明解国語辞典』は「新解さん」と擬人化され、以降、赤瀬川原平『新解さんの謎』（文藝春秋、1996年、ほか）、鈴木マキコ『新解さんの読み方』（リトル・モア、1998年、ほか）、夏石鈴子『新解さんリターンズ』（角川文庫、2005年）などが書かれていきます。「読み物としての辞書」という特定ジャンルが成立したとはいえませんが、「新解さん」、版を改めるごとにおとなしくなくなってしまったようで、最近ちょっと毒抜きされた感があるということです。擬人化して辞書を読みくらべる、というものに、サンキュータツオ『学校では教えてくれない！国語辞書の遊び方』（角川学芸出版、2013年）があります。「学者芸人」だというサンキュータツオさん、読みやすく、たのしく書いています。

しかし、いくら辞書が面白いといっても、一般的には愛読書にはなりません。ちなみに、辞書を引くということが、初等教育から習慣化が目指されたのは、明治までさかのぼることはできません。「乖離」を強制的に縮めていこうとしたのは、実は敗戦後の占領下のこと

でした。GHQ 主導で教育改革がおこなわれた際に、いまの学習指導要領のもとになるものが作成されます。そこでは、小学生のための学習用辞書が存在していないことが指摘される一方、四年生から辞書を引く指導をすべきことが盛り込まれていきます。「辞書に頼りすぎないように」という配慮はあったのですが、文部省編集の学習指導要領になると、この文言は消え、辞書を引くことを習慣化することが強調され、現在では辞書指導は三年生からになっています。さらには、深谷圭助『7歳から「辞書」を引いて頭を鍛える』（すばる舎、2006年）という実践に基づく本が出版されて反響を呼んでいるように、英才教育的な色彩も帯びてきています。学力向上につながるならいいではないか、と思うかもしれませんが、「辞書に頼りすぎ」のようにも思います。「ことばの正しさ」を何の疑いもなく受け入れていってしまうのではないか、と思うのです。

こうした点とあわせて考えると、電子辞書の普及は、辞書をより身近なものにしたと思います。ただ、いつでも手軽に引けるということは、実は引かないことにつながっているのではないか、とも思うのです。きちんと予習をしていなくても、当てられたらその場で引いて適当にごまかす、といった場面に、私などもよく接するようになってきました。

愚痴はともかく、辞書がより引きやすくなることは、同時に規範が知らぬ間に、より身近になってきたことも意味します。いま現在、電子辞書のためだけの辞書は編纂されていないと思います。ただし、三省堂の『スーパー大辞林』（2006年）は web サイトでも提供されており、新語の増補がしやすくなっています。同様なものに小学館の『デジタル大辞泉』（2012年）があります。そうした変化はありつつも、大半は紙の辞書を電子化したのが電子辞書なわけであり、紙の辞書がかかえる限界も、同時に電子辞書は抱えているわけです。たとえば語彙数とか、語釈の長さとか。しかし、インターネット上での検索は、語彙数も語釈の長さも、ほぼ制限なしといってよいでしょう。

となってくると、辞書を引いた先（あるいはインターネットでの検索結果）にある「正しさ」を見つめる視線の確立が急務のように思われます。「ことばの正しさ」とは何か、それはだれがどうやって決めるのか、そもそも、そうしたことが可能なのか、可能ならばなぜなのか、などなど。

やはり、わたしたちの日々の言語使用と、電子辞書も含めた辞書とのあいだには、広くて深い溝が存在しつつけているように思われるのです。だから、先人の偉業・知識の集積である辞書をよく引き、ことばの意味を「正しく」使おう、というありふれたことを、ここで書くわけにはいかないのです。

むしろ、批判的に辞書を引きましょう。それは単に語釈を批判するためだけではなく、そこにひそむ「権威」に対しても、批判的であるために。なぜなら、ことばは「わたし」のものなのですから。

以上のような話は、安田敏朗『辞書の政治学——ことばの規範とはなにか』（平凡社、2006

年) で詳しく論じています。興味を持った方はぜひとも読んでみてください。本学図書館にも所蔵されています。